
テレビ東京
『ありえへん∞世界』に関する意見

放送倫理検証委員会

委員長	川端 和治
委員長代行	小町谷育子
委員長代行	吉岡 忍
委員	石井 彦壽
委員	香山 リカ
委員	是枝 裕和
委員	重松 清
委員	立花 隆
委員	服部 孝章
委員	水島 久光

目 次

I	はじめに —— 飛行機とロレックス	1
II	審議の対象となった番組	3
III	番組の反響と問題の発覚	5
IV	なぜこのような事態が起きたのか —— 過失と故意のあいだ ..	6
	1. ロケ台本	7
	2. 取材～編集	8
	3. スタジオワーク	11
V	委員会の判断	12
VI	おわりに —— そして人生はつづく	13

I はじめに ― 飛行機とロレックス

目の前に広がる現実には、無数の事実から成り立っている。もちろん番組は、そのすべてを写し取ることはできない。制作者は描こうとするテーマに基づいて、そこからいくつかの事実を切り取り、構成し、演出することによって番組を作り上げていく。

この、事実の切り取り、構成、演出が、真実の発見や追求のプロセスになることもあれば、現実の曲解や捏造につながることもある。番組制作はいつもこの危ういバランスの上で行われている。では、この真実の発見・追求と現実の曲解・捏造を分ける境界線はどこに、どのように存在するのだろうか。

そして、この区別に失敗したとき、いったい何が起きるだろうか。

サンプルを2つ示しておきたい。

*

沖縄県の離島のひとつに、南大東島がある。台風の通り道として、天気予報などでもよく出てくる、サトウキビ栽培が主産業の島である。

ある番組がこの島を「へき地」として取り上げ、東京から行こうとすれば、羽田空港→那覇空港が4時間、さらに貨客船に乗り換えて15時間かかり、トータルで19時間もかかる、と紹介した。画面にはずっと「東京から19時間！」というテロップが出つづけていて、番組だけ見ていれば、たしかに相当なへき地だと思わせられる。

ところが、実際には那覇空港と南大東島間は1日1～2便、39人乗りの小型旅客機が1時間10分で結んでいて、島の人たちが普段使っているのは、この定期航空路の方である。

番組の制作者たちはこうした定期航空路があることを知ったうえで、15時間かかる貨客船についてのみ番組で紹介するのは「演出上の許容範囲」だと考えた。たしかに番組内では「飛行機は飛んでいない」とも、「船しかない」とも言っていないから、その意味では、これは虚偽ではないかもしれない。

*

では、もうひとつ、こちらのサンプルはどうだろうか。

この番組の取材のために島を訪れたロケ・ディレクターは、へき地のびっくりするような一面を描こうと考え、お金持ちのサトウキビ農家を探し始めた。頭にあったのは「年収1000万円以上」で、「外車やブランド品」を持ち、どこかに豪華な「別荘」を所有している、というイメージである。

しかし、見つからなかった。そこで彼は島民のひとりから高価で知られるロレックスの腕時計を借り、取材に応じてくれたサトウキビ農家の男性の持ち物であるかのように装い、「その、しているロレックスは？」とインタビューする場面を撮影した。

言うまでもなく、これは捏造である。さすがに心配となったロケ・ディレクターが

東京にいる先輩ディレクターに相談したところ、「それはやってはいけないことだ」と指摘され、結局、この場面は放送に使われることはなかった。

*

ここに掲げた2つの例は、委員会が今回審議した番組の制作過程で実際に起きたことである。

この番組の制作者たちは、「飛行機」と「ロレックス」の間に、演出をめぐる1本のボーダーラインを引いている。つまり、存在するものをないように見せる（定期航空路がこれに当たる）ことはOKだが、ないものをあるように見せる（農民のロレックスがそうだ）のはNGだ、という判断である。

しかし、ロレックスの話は論外としても、定期的に飛んでいる航空路線があることを故意に隠して、この島がいかにもへき地だと表現することは、本当にOKだろうか。

日本民間放送連盟（民放連）が定めた放送基準には、報道であれ、バラエティーであれ、「事実に基づいて報道し、公正でなければならない」とあり、「ドキュメンタリーや情報系番組においても虚偽や捏造が許されないことはもちろん、過剰な演出などにならないよう注意する」と特記されている。

これと考え合わせると、この1番目の例もやはり「事実」に基づかない「過剰な演出」と言われても仕方ないのではないだろうか。

一定の経験を積んだ制作者であれば、判断に迷うようなこの種のことは何度か経験しているにちがいない。

制作者には、描きたいものを描きたいように描く自由がある。その自由を行使すれば、こうしたフレーミングの方法やコメントの切り取り方によって、ある事実を正反対のものとして伝えることすらできる。極端に言えば、そういう自由もある。

だが、そんなとき、番組制作者の行き過ぎを押しとどめるものは何だろうか。

上記の2つのサンプルには、じつはもうひとつ、隠れている問題がある。

とんでもなく不便なへき地に暮らしている、と番組で放送された島の人たち。あるいは、ロレックスの場面はカットされたとはいえ、そんなへき地でありえないほどのお金を稼いでいると放送された人たち。これら島の実情とはちがうイメージが、放送によって独り歩きし始めたら、どうなるだろうか。

ここには番組と番組に出てもらおう人たちとの関係、とりわけ番組制作者が取材に協力してくれた一般の人たちとの関係をどう築くのか、という問題がひそんでいる。今回の事案がとくに示しているのは、この制作者と取材協力者との関係における放送倫理の問題である。

*

委員会の役割は、ある番組が放送倫理に違反しているかどうかを検討し、違反している場合には、その背景まで含めて具体的に検証することにある。だが、私たちがつ

ねに願っていることは、当該番組の関係者だけでなく、多くの番組制作者が番組の質について、演出について、放送倫理について、より掘り下げた思考をしてほしいということである。

この意見書はそのためのいわば共有財産でもある。生かすにせよ、殺すにせよ、それはいま、これを読み始めたあなたの手委ねられている。

II 審議の対象となった番組

委員会が審議の対象としたのは、テレビ東京が2011年1月25日午後7時から放送した情報バラエティー番組『ありえへん∞世界』のなかの約18分のコーナー「ありえへんへき地・第2弾、南大東島に潜入取材」である。

約1時間の番組全体は戯画的な関西弁風のナレーションで進行するVTR部分と、それを話のネタに交される芸能人・タレントのスタジオトークによって構成されているが、問題となったのはこの番組中のメイン企画「南大東島の年収1000万円以上の農家たち」である。(以下、文脈に応じて「本件番組」ともいう)。

*

本件番組は冒頭、南大東島がへき地等級でもっとも不便な5級（沖縄県職員の給与に関する条例による）という辺鄙な地であることを紹介し、ナレーションが「沖縄本島から東へ360キロも離れた、どえらい場所にある孤島」「羽田からおよそ4時間かけて那覇空港に到着し、那覇・泊港からフェリーで15時間かかる」「飛行機やったらニューヨークまで行ける時間や」等々と説明する。

これは、「はじめに」で最初に示した演出サンプルである。ナレーションは70分で行ける定期航空路があることを隠しているのも、スタジオからは狙い通り、「外国みたい」「まさにへき地」と、驚きの声が上がっている。

スタジオ出演者は「豪華客船か」と期待するが、ロケ・ディレクターが乗り込んだのは貨物兼用の普通の客船で、15時間かけて到着すると、背の高いクレーンに吊られたゴンドラが接近してくる。荷物のようにそのゴンドラに載せられ、運ばれるという「ありえへん」上陸シーンが映し出される。島の海岸は断崖絶壁ばかりで、船が横付けできないからだという。

スタジオからは「こりゃおかしい」と笑う声が聞こえる。画面上には「東京から19時間 謎のへき地 南大東島へ潜入」という字幕が出つづけている。

番組はここから南大東島の4つの「ありえへん」エピソードを紹介していく。その最初に登場するのが、今回、問題となったエピソード「へき地の農家（南大東島の年収1000万円以上の農家たち）」である。ちなみに、他の3つは「へき地の中毒グルメ（脂の乗った深海魚の話）」「へき地の絶滅危機動物（純血種が少なくなった大東犬

の話)」「へき地の年越し (八丈島からの開拓団と沖縄の食文化が混ざった正月料理の話)」をそれぞれVTRで紹介する、というものだった。

*

画面はサトウキビ畑とハーベスタ (大型農業機械) を映し出し、つづいてハーベスタから降りてきた男性がインタビューに応じる。この間、彼が顔に手を当てた瞬間、左手にはめた高価そうな金時計が見える (これが「はじめに」で触れたロレックスの腕時計だ)。質問に答える男性は「年収1000万円を超える農家が、自分を含めて島には150から200人はいる」「サトウキビ農家は国から補助金をもらっているので、普通の農家より儲かる」という趣旨のことを語る。

画面は図解に切り替わり、サトウキビを製糖会社が買い上げる1トン当たり5000円という価格と、さらに政府から支払われる1トン当たり1万7000円の補助金が農家の収入になる旨の説明がされる。目の前に広がるサトウキビ畑を男性が「まるで1万円札がたくさん生えているような感じですよ」と冗談めかして言うと、スタジオから歓声と拍手が沸き上がる。

「そやけどこの何もない島で、(そんな大金を) いったい何に使うんやろか」というナレーションにつづいて、ロケ・ディレクターが「(家は) 豪邸なんじゃないですか」と質問すると、男性は「そうでもないですよ、普通の家で。その代わり沖縄本島にも家があるので、そこに金かけています」と言う。

つづいてナレーションの「そう、南大東島のサトウキビ農家の多くは、沖縄本島にも家を持つとって、それが、島民のステータスにもなるとるらしいわ」という説明とともに、画面には白いコンクリート造りで、2棟並んだ立派な家の写真が映し出され、そこに「サトウキビ農家のステータス 沖縄本島に別荘」という大きな文字が出る。脇に小さく「イメージ」の文字もあるが、この写真とスーパーとナレーションとがあいまって、その家が明らかにインタビューに答える男性の所有物であるかのように編集されていて、スタジオからも「すごい」「ええな～」という声上がる。

さらに「要はハリウッド俳優がビバリーヒルズに家を建てるようなノリやで」というナレーションを重ねて、画面には山肌に立つ「HOLLYWOOD」の看板と、ビバリーヒルズにあると思われる別の白亜の豪邸の写真が映し出され、そのどちらにも「ビバリーヒルズに豪邸のノリや！」の派手なテロップがかぶさっている。

その後、話題は、先の男性がサトウキビ収穫の作業に使うハーベスタが1台6000万円もすること、それを所有することもまたステータスになっているという話に移っていく。ナレーションが「沖縄本島に別荘、さらに6000万円のハーベスタ」と言うと、画面の右半分はこのハーベスタの写真と、左半分には先ほどの白いコンクリート造りの立派な家の写真 (一部) が出て、「別荘」「6000万円のハーベスタ」のテロップが重ねられて、ナレーションが「それが南大東島ドリームちゅうわけや」と締

めくくる。

どう見てもこれは、この男性なり、南大東島のサトウキビ農家の多くが写真のハーベスタと別荘の両方を所有し、「南大東島ドリーム」を体現しているといわんばかりの演出と流れである。

＊

つづいて、場面は島の成人式に切り替わって、新成人の青年が登場する。「サトウキビ農家の御曹司で、すでにバリバリ働いている」と紹介された青年は前歯の1本が少し欠けている。

有名ブランドのルイ・ヴィトンのバッグを手にしながら本人が言うには、年収は500万円以上で、自分のかわいい目と、うしろ髪の高い容顔が女の子にモテるのだそうだ。ナレーションは「ヴィトン買うより前歯治したほうがええんとちゃうか」と揶揄しながら、「ちゅうわけで、サトウキビ農家はカネも女の子も手に入るおいしい仕事やった」と、いささか下品な調子で締めくくり、このコーナーが終わる。

スタジオからは「すごーい」という歓声がひと言だけ聞こえ、番組は次のエピソードへと移っていく。

Ⅲ 番組の反響と問題の発覚

番組放送後、インターネットのブログや掲示板などに「おかしい。農家にカネを渡すからこうなるんだ」などと、政府がサトウキビ農家を対象に行っている交付金（番組では「補助金」と表記）に対する批判が書き込まれ、取材に協力した島民らが困惑する事態が持ち上がった。

これを受けて南大東村長はテレビ東京に対し、

(1) 昨年のサトウキビ栽培農家の平均的な粗収入は約500万円であり、そこから苗代代、肥料農薬代、機械代金等、生産に必要な経費を除くと、1戸当たりの所得（税法上の「利益」）は150万円程度にしかならないこと。

(2) 番組にあったような粗収入が1000万円を超える農家は、243戸のサトウキビ栽培農家のうちの26戸のみであり、それも生産費を除いた平均的な所得を見ると、300万円にしかならないこと。

(3) 番組中で南大東島の農家が沖縄本島に豪華な別荘を持っているとされた件についても、島に高校がないため、島民の子供たちが沖縄本島の高校に通うためにはアパートを賃借するか、住居を所有する必要がある、どれもビバリーヒルズの豪邸などと比較されるようなものではないこと。

等々、南大東島の実情を述べ、「(本件番組が) 偏見に基づいた、誤解を招く内容」であったとして抗議し、訂正と謝罪を求める4月1日付けの文書を送付した。

テレビ東京があらためて番組内容を調査したところ、村側からの指摘がそのとおりであり、ロケ・ディレクターらが生産費を含めた「年収」をいわゆる純粋な「利益」と勘違いしたまま放送したこと、サトウキビ農家の男性が語った島の経済状況についての裏付けを取っていなかったこと、島民の一部が本島に所有していた住居についても、ビバリーヒルズの豪邸と比肩できるような豪華なものではないことなどが判明した。

こうして4月18日には、本件番組のチーフ・プロデューサーとプロデューサーが「お詫び」の文書を持参して、また5月2日には同局制作局長とチーフ・プロデューサーがそれぞれ南大東島を訪れ、村長と関係者に謝罪するとともに、6月7日放送の同番組内において訂正とお詫びの放送が行われた。

なお、この間、テレビ東京は本件番組の制作過程を調査した結果を『『ありえへん∞世界』における不適切な表現に関する問題点の検証と再発防止について』と題する文書にまとめ、6月3日に委員会に提出した。

IV なぜこのような事態が起きたのか —— 過失と故意のあいだ

本件番組『ありえへん∞世界』は、テレビ東京が上に記した南大東村長宛てのお詫びで述べているように、「さとうきび生産への偏見あるいは南大東島を揶揄するものではなく、バラエティー番組として他村にない南大東村の独自性と魅力を伝えるよう番組制作を行ったつもり」で企画された。

委員会は、この同じ番組が以前に放送した別のへき地をテーマとした回を参考資料として視聴したが、そこにはたしかにへき地をおとしめることがないよう極力注意している様子がうかがわれた。また、番組プロデューサーも委員会が行ったヒアリングにおいて、「あとで取材された人に、取材を受けなければよかったと思われるような番組はけっして作りたくないと思ってきた」と語っている。

しかし、そうであればなぜ、今回はそうならなかったのだろうか。

なお、委員会がヒアリングを行ったのは、この番組プロデューサーのほか、総合演出、構成作家、担当回チーフ・ディレクター、ロケ・ディレクターなど、本件番組の制作を主に担当した5人である。

*

本件番組は、ナレーションに戯画的な関西弁を多用し、番組全体に関西弁特有の毒気とユーモアを織り交ぜながら、取り上げるネタを料理してみせようという番組である。東京で制作され、スタジオトークの芸能人・タレントも関西人に限っていないが、その語り口調の面白さを前面に出そうとしている。

また、実際、制作の中心にいる総合演出と構成作家の2人は関西出身であり、番組

スタート当初から、この2人が普段に、またVTRを見ながら交す「ボケ」と「ツッコミ」的かけあいがナレーション原稿に反映され、本件番組の基調となるトーンが形成されてきた、という経緯もあった。

しかし、言語的かけあいから面白みを表現することは、その言語の持つ歴史的・文化的背景への理解や、ひとつひとつの言葉を駆使する高度なテクニックが欠かせない。それを母語としない人たちが、表面的に言葉遣いをなぞっただけでは、たとえば揶揄は文字通りの揶揄となり、毒はただの毒となってしまう。

また、たとえ関西弁の使い手がスタッフ内にいたとしても、番組制作の場合には、VTR、ナレーション、スタジオトークの全体が互いにツッコんだり、ボケたりと、有機的にかみ合っていないければ、かけあいの面白みのない、ときにはとげとげしいものになってしまう。こうした意味では、この番組にはもともと高いハードルがあったとすることができる。

以下では、番組制作のプロセスをたどりながら、本件番組の問題点を検証していくことにする。

1. ロケ台本

南大東島取材を担当した30代のロケ・ディレクターは制作会社に所属し、本件番組の制作に参加してまだ日が浅かった。初めて単身で、撮影機材を持ち、事前の予備取材（ロケハン）もなく、いきなり本番用の取材をしなければならないことに、本人は「大変だなと思った」と、本委員会のヒアリングの場で語っている。

なお、このロケ・ディレクターは南大東島の現地取材のあと、その後のVTRと資料映像の粗編集、ナレーション原稿の下書き等も担当することになる。

彼は出発前、担当回のチーフ・ディレクターらに聞き、インターネット等で調べて、どのような取材内容になりそうかを想定した「ロケ台本」を作成した。

そこには、「若い子が（通信販売の）ダサイカタログをみている」「こんなへき地なのに年収ウン千万も」「成金なんや」などといった、へき地とそこで暮らす人々に対する侮蔑や揶揄が色濃く感じられる想定ナレーションや仮のコメントがこまかく記されていた。

なぜこのようなロケ台本が作成されるに至ったのだろうか。

*

前に見たように、本件番組は関西出身の総合演出と構成作家が日常的に交している毒舌的なかけあいを基調トーンとし、番組の個性としてきた経緯があった。戯画的に誇張された関西弁風の名詞が使われているのも、それゆえだった。

ロケ・ディレクターはこのトーンを模倣しようとした。生真面目に過剰適応した、と言ってもよいかもしい。しかし、うまくいかなかった。つまり、高いハードル

を越えようとして越えられなかった「過失」である。結果として放送された番組は、このロケ台本にあるような侮蔑や揶揄のニュアンスがそのまま転写されてしまった印象が強い。

このロケ台本には、担当回のチーフ・ディレクターが赤字で書き込んでいねいなコメントが記され、ロケ・ディレクターの「思い込み」や「決めつけ」をたしなめている。チーフ・ディレクターはヒアリングでも、「面白がり方が、たんにふざけているだけのように感じた」と言っている。

チーフ・ディレクターはこのコメントをメールでロケ・ディレクターに送り、その後の電話でも追加説明をしているが、その趣旨がきちんと伝わったかどうかは不明である。初めて、単身で現地に赴いたロケ・ディレクターはなかなか「ありえへん」ような話題が見つからないまま、自分で書いたロケ台本に「縛られ」るようになる。本人は「へき地という企画や、ありえへんという番組イメージが頭のなかで先行し、そこに縛られてしまった」と語っている。

*

とはいえ本件番組は、取材対象に向けられる揶揄と隣り合わせの視線に対し、みずからツッコんだり、ボケたりしながら、笑いへと転じていこうという高度な技術やセンスを制作スタッフと出演者の全員に要求する、ある意味では気概に満ちたバラエティーを目指していたはずである。たとえロケ・ディレクターの取材してきたものがこうした番組の狙いを満たさないものであったとしても、そのズレを見逃すことなく認識し、その後の編集やスタジオワークのなかで、1段も2段も高い笑いへと変換して番組化するのには、番組制作の中核にいる幹部制作者たちの仕事である。

彼らが、経験の浅いロケ・ディレクターひとりに現地取材を任せてしまった、という制作体制の落ち度を指摘しないわけにはいかないが、同時に、取材素材を十分に吟味し、そこから番組が本来目指していたバラエティーらしい笑いを創作できなかった点も見逃すことはできない。

2. 取材～編集

本件番組中、ナレーションが「(沖縄) 本島に家があることが島民のステータスになっとるらしい」と説明した「別荘」をめぐる問題について、ロケ・ディレクターとサトウキビ農家の男性とのやりとりは、取材テープに以下のように記録されていた(テレビ東京が本委員会に提出した報告書による)。

質問「もしかして家は豪邸なんじゃないですか？」

男性「いえ、ここの家は、小さいんですが、その代わり沖縄本島にも家があって、そっちには金かけてます」

質問「なぜ別荘があるんですか？」

男性「島には高校がないので、子どもが高校生になると本島に出て行くので、本島にも持ち家がないとダメなんです。高校・大学と成人までに1000万円以上かけないと子供たちを教育できないもので、だからその分サトウキビ作って1000万以上儲からないと子供たちを教育できないということですね」

ここに明らかのように、ロケ・ディレクターは取材時点で、島民たちが沖縄本島に家を持つ理由を明確に聞き取っていた。つまり、それは富裕であることを誇るための豪邸などではなく、島民たちが島の地理的・文化的条件の下で子供たちの教育を考え、必要に迫られて借りたり、所有していたものだった。

だが、本件番組ではこの理由を述べた後段の部分がカットされ、そこにあたかも南大東島の農民が沖縄本島に所有しているかのように、白いコンクリート造りの立派な家のイメージ写真が映し出され、さらに「要はハリウッド俳優がビバリーヒルズに家を建てるようなノリや」というナレーションとともにハリウッドやビバリーヒルズの豪邸の写真がかぶせられ、その上もう一度だめ押しのように沖縄にあるという白いコンクリート造りの家が高価なハーベスタと並べて映し出された結果、彼ら農民は「ありえへん」くらいお金持ちだから、こういう豪勢な別荘を実際に持っているのだ、と強く印象づける編集・演出が行われていた。これは明らかに事実を無視し、視聴者の認識を誤らせる編集であった。

ここで再び、本意見書の「はじめに——飛行機とロレックス」で触れた情報処理をめぐる問題が浮上することになる。

テレビ東京は、南大東村長宛てのお詫びのなかで繰り返し「視聴者に誤った印象を与えかねない表現となってしまった」と述べ、「過失」を強調している。しかし、この「別荘」の部分に関しては、飛行機の存在を伏せて「へき地」感を誇張したのと同様に、意図的な情報操作が行われている。つまり、これは過失ではなく、「故意」である。

＊

じつはロケ・ディレクターは南大東島からの帰途、沖縄本島に立ち寄り、取材した男性とは別のサトウキビ農家が所有している家を撮影していた。むろんビバリーヒルズにあるような豪邸ではないが、それなりにしっかりした家だったという。

ところが、撮影したビデオテープがなぜか破損し、使えなかったという。彼はこの失態を幹部制作者らに報告できなかった。追加撮影を申し出られる状況は、予算的にも日程的にもなかった。困った彼は沖縄の一般的な町並みの写真をダミーとして挿入し、粗編集したVTRを幹部制作者らに見せた。

番組プロデューサーや総合演出はそれを見て、「写真でもいいから、実物の映像はないのか」と質し、ロケ・ディレクターに手配するよう指示した。ロケ・ディレクター

は南大東島に電話し、その返答を待っていたあいだに、演出プラン作成の会議が開かれることになった。

*

演出プラン作成のための会議は、ロケ・ディレクターが粗編集したVTRをプレビューしながら、主には総合演出と構成作家の関西弁のかけあいによって進められた。この時点でのVTRでは、先に引用したインタビューの後半がカットされていたので、2人は島民たちが沖縄本島にアパートを借りたり、家を持ったりする本当の理由を知らなかった。

席上、総合演出と構成作家はその家について、「これは、ハリウッドスターがビバリーヒルズに別荘を持つようなものや」「それがここに住む人たちの南大東島ドリームと言ってもいいんじゃないか」等々と演出のアイデアを出し合っている。

ロケ・ディレクターはこのやりとりを聞いて、実物の家の写真ではなく、演出アイデアに沿って、それらしい豪勢な家の写ったイメージ写真と、「ハリウッド」や「ビバリーヒルズの豪邸」の写真を挿入すればよい、と思いつく一方、本件番組で使われたような、「本島に家があることが島民のステータスになっとるらしい」「要はハリウッド俳優がビバリーヒルズに家を建てるようなノリや」「1台6000万円のハーベスタを所有し、沖縄本島に別荘。それが南大東島ドリームというわけや」等々のナレーション用の粗原稿をまとめていった。

結局、沖縄本島にある実物の家の写真については、その後の慌ただしい制作過程にまぎれ、立ち消えになっていく。

*

ヒアリングによれば、こうしたプレビューの前後、総合演出はロケ・ディレクターに対し、「このような表現をしても大丈夫か」と確認を求めたという。これは沖縄本島にあるという家に限った質問ではなく、VTR全体に関する印象を問い質したものだ。

そう問われてロケ・ディレクターが真っ先に思い浮かべたのはその家の問題だったという。たしかに別荘の意味合いは、島民が沖縄本島に家を持つ理由の削除と、まったく別の白いコンクリート造りの家の写真を挿入したことによって、現実とはまったくちがうものに変質してしまっており、「ハリウッド」「ビバリーヒルズの豪邸」というナレーションや映像の追加によって、そのズレは決定的になっていた。しかし、ロケ・ディレクターは「サトウキビ農家の人々を島の金持ちとして紹介するということはあらかじめ取材相手には了承を得ており、大丈夫だ」と考えた。

たしかに取材を受けたサトウキビ農家の男性は自分の畑を指差しながら、「まるで1万円札がたくさん生えているような感じです」と語っている。だが、ロケ・ディレクターが収入と利益（所得）の相違を誤解し、制作幹部らもこの誤解を見過ごしたう

えに、本島に持つ家の意味合いを編集によって変更してしまった結果、本件番組では、金持ちイメージのみが「ありえへん」話として、また受け止め方によっては不当に利益を享受している農家の姿として、ネガティブに増幅される結果となってしまった。

ここでは制作スタッフが考える「面白さ」が、取材を通して把握された「事実」よりも優先されてしまっている。その「事実」を守り得たのは現地で取材をしたロケ・ディレクターだけだったが、彼もまた「ちがう、と感じたことはなかった」とヒアリングの場で語っていて、特段の違和感を感じた様子はない。

こうした一連の編集作業によって、本件番組は「事実に基づ」かず、「公正」さに欠けた「過剰な演出」となり、「一方に偏るなど視聴者に誤解を与え」るだけでなく、そのことによって取材に協力してくれた「個人」と、南大東島に暮らす人たちの「名誉を傷つけ」るような素地が作られていった（この段落のカギ括弧は、民放連放送基準の該当箇所からの引用を示す。詳しくはのちの「委員会の判断」を参照）。

*

仮にの話だが、このときもし現地を取材した若いディレクターが違和感を感じていたとしたら、どうだろうか。

取材現場に立ち会っていないスタッフ、とくに幹部制作者らによって後出しで加えられる「それはさあ、〇〇と解釈しても間違いとは言えないんじゃないの？」という演出プランに対し、「それは違う」と抗うことは、一般の若いディレクターにとってはなかなか困難な場合もあるにちがいない。

だが、こういうときこそ、取材に協力してもらった人たちの顔を思い浮かべ、もう一度立ち止まって考えてみる必要があるのではないだろうか。とりわけ一般人を取材対象とする本件番組のような場合、番組はスタッフだけで作っているのではなく、その外側にいる多くの協力者によって支えられている。ここには、制作者は取材協力者との関係をどう考えるのか、という問題がある。

3. スタジオワーク

一般的に言って、南大東島の島民が沖縄本島に家を持つことを「南大東島ドリーム」と比喩的に表現すること自体に間違いがあるわけではない。

番組プロデューサーも総合演出も構成作家もヒアリングのなかで、本件番組は、VTRとナレーションとスタジオトークの3者が、互いに互いを批評し合いながら有機的に結びつき、発展していくことによって面白さが醸し出されるような種類の番組である旨をこもごも語っている。

つまり、沖縄本島に家を持つという話題に即してみれば、ナレーションで「南大東島ドリーム」と大仰に煽っておいて、「ハリウッド」「ビバリーヒルズの豪邸」とたたみかけ、実際にはそれほどでもない家を映像で提示し（ボケる）、それを受けてスタジ

オトークが「ビバリーヒルズは言い過ぎだ」とツッコミを入れる——これが彼らが期待した望ましい展開だった、ということであろう。

しかし、本件番組では、そのターニングポイントになるはずだった家の映像がなく、代わりに挿入されたのが、白いコンクリート造りの立派な家というイメージ写真であり（ベタ＝ありきたりで陳腐）、つづいてハリウッドとビバリーヒルズのイメージ映像を伴う月並みなナレーションがこの映像と同じベクトルで追従し（ボケられなかった）、さらにはスタジオトークも同じ方向で感嘆の声を上げるだけで、全然切り返していない（ツッコめなかった）。ここには面白いかけあいはなく、発展していくダイナミズムも生じていない。

なお、通常、この番組のスタジオ収録には、芸能人やタレントなどの出演者用の台本は用意されていない。制作者側が想定し、期待するようなスタジオトークに発展していかなかった場合でも、撮り直し等はしないという。

結果として、ツッコミやボケのかけあいを誘発するきっかけがないまま、南大東島のサトウキビ農家は沖縄本島に豪邸を持っている、という間違った「事実」が番組によって認定され、ベタのまま独り歩きをしてしまうことになった。こうして本件番組は、島民たちの現実を置き去りにし、事実から遊離した過剰な演出となり、視聴者に誤解を与えるだけでなく、島民たちの名誉を傷つけるものとなった。

＊

本件番組の最後に、新成人となった地元の青年へのインタビューがあった。そこに「サトウキビ農家はカネも女の子も手に入るおいしい仕事やった」というナレーションがかぶせられている。これはいささか下品な、視聴者によっては制作者の制作姿勢に嫌悪を感じるような終わり方だった。

たしかに青年は、この年代にはありがちな背伸びをした発言をしたかもしれない。カメラの前でそうしゃべったのだから、その映像を使うことに何の問題もない、と言うことはもちろんできる。

しかし、これもまた前段の豪邸やハーベスタについての「ありえへん」ような金持ちぶりと、それがあたかも過大な補助金という手段によって可能になったかのような説明のあとに置かれると、ただの揶揄、後味の悪い嫌味のようにあり、番組が目指したはずの面白い、笑いに満ちたバラエティーからはほど遠いエピソードにしかなくなってない。

V 委員会の判断

これまで見てきたように、本件番組は南大東島のサトウキビ栽培農家の年収や暮らしについて、事実を正確に伝えず、楽をしてお金を稼げる仕事であるかのような誤っ

た認識に視聴者を導き、取材に協力してもらった人々を含む多くのサトウキビ農家への偏見を煽る結果を招いてしまっている。

委員会はこうした点を、日本民間放送連盟の放送基準が定めた「事実に基づいて報道し、公正でなければならない」(第6章32項)、「個人・団体の名誉を傷つけるような取り扱いはしない」(第1章2項)、「取材・編集にあたっては、一方に偏るなど視聴者に誤解を与えないように注意する」(第6章34項)等に照らし合わせて検討し、本件番組が放送倫理に違反したものであった、と判断する。

本件番組は事実を淡々と描くというよりは、その事実を誇張したり、その誇張の仕方をみずから批評して、視聴者に事実の別の側面を気づかせたりする、というかなり手の込んだバラエティーの創出を目指したものであった。委員会はその意欲を高く買いたいと思うが、しかし、そうであればいっそう制作者らはその狙いを活かすような素材の収集と編集と演出に注意深く取り組み、さらにまた狙いにうまく当たらなかった場合のこともあらかじめ考え、対応を準備しておくべきではなかったろうか。

上記の放送倫理違反は、事実の誤認や再確認の欠如によってだけでなく、番組の仕掛けや、「はじめに」でも述べたような作為的な演出手法からも生じている。こうした原因のひとつひとつに、制作体制の緩みがなかったか、編集・演出の手法に独断がなかったか、制作者と出演者との意思の疎通に問題がなかったか等、番組の原点に立ち返って再点検していただきたい、と委員会は願っている。

VI おわりに —— そして人生はつづく

最後に、愛について語っておきたい。

一般人を取材対象とするバラエティー番組の場合、制作者や出演者がもっとも大切にしなければならないのは、その対象とした人たちへの愛ではないだろうか。この分野には多くの先達がいるが、たとえばラジオ番組で活躍する毒蝮三太夫氏がいくら「ババア」「ガキ」と連呼しても、そう言われた当事者もリスナーも不快に感じないのは、彼のパーソナリティーもさることながら、何より彼の一般の人たちへの愛が深いからではないだろうか。

では、放送における愛とは何だろう？

これはけっして抽象的な問いではない。テレビやラジオの制作現場において表現される愛とは、そのまま技術やテクニクと呼び替えられるべきものだからである。

愛にはさまざまな形がある。もちろんそれは、取材相手の言うことを鵜呑みにすることではない。それどころか、逆である。相手が口にしたことや、その容姿から受ける印象を「ありのまま」に視聴者という不特定多数の目にさらすことは、むしろ愛の欠如、演出の放棄である。

ディレクターや出演者は、その人の言動が視聴者にどう受け取られるか、そのひと言を放送することによって、果たして彼や彼女の生活や人生に悪影響が出ることはないだろうか、とまず考えなければならない。そのうえで、場合によっては予見される視聴者からの揶揄や拒絶反応を先回りし、その場でその相手をかばい、救うような冗談や言葉を発しておくこと——そのような機敏な判断と発話が、ディレクターや出演者には求められているはずである。それができるのが、プロであろう。

できれば撮影現場で、かなわなければナレーションで、それも無理ならスタジオトークで、取材対象とした人のネガティブと受け取られかねない側面を、個性として光らせ、あるいは本人も噴き出すような笑いに転化しておくことによって、制作者・出演者は彼らの人生を、生活を守ることができる。

それは、高度ではあるが、このジャンルの番組制作に挑もうという志のある制作者や出演者なら、身につけておくべき必須のテクニックであると考えていただきたい。

*

本件番組のロケ・ディレクターは私たちのヒアリングに答えて、取材に応じてもらった人たちが視聴者にどう思われるかについて、「そこまでは思い至らなかった」と率直に述べていた。これは、被取材者の発言内容の責任は本人自身が負うべきものだ、と突き放していたということである。

しかし、取材者は無色透明な媒介ではない。現場に出て取材する者は、番組内容全体の責任を最前線で背負っている、ということを忘れないでほしい。多大なプレッシャーのなかでロケ・ディレクターをつとめたこの若い制作者には、今回の失敗を「取材者の責任とは何か」「放送における愛とは何か」ということについて考える契機にしてほしい、と私たちは切に願っている。

では、彼が取材してきた素材をもとに演出プランを作り、スタジオ収録し、放送に至った幹部制作者たちはどうなのか。彼らには番組に協力してくれた人たちへの愛があったのだろうか。私たちは彼らにもやはり「放送における愛とは何か」を考えていただきたい、と言っておきたい。

*

テレビ東京が委員会に提出した報告書のなかに、今回の事案は「ヒューマンエラー」だったと述べる一節があった。本件番組は単なるエラーではなく、かなり意図的に現実を歪め、視聴者を誤った認識へと導く演出が行われていたことは、上に見てきたとおりである。

だが、ともあれ番組も人間が作っている以上、こうした誤った作為やエラーをすべて確実になくすことは難しいかもしれない。しかし、都市であれ、へき地であれ、一般市民を取材し、その人たちの仕事や生活の様子を番組化するというテレビならではの表現に足を踏み入れる制作者は、自分は人々の暮らしや人生を大きく傷つける危険

とつねに隣り合わせにいるのだと肝に銘じたうえで、その一歩を踏み出してほしい。

普通に生きている人たちの人生はゲームではない。たんなる演技でもない。取材された人たちにとってはエラーではすまされない現実の人生が、放送のあともずっとその町で、その村で、その場所であつづいていくのだから――。